

本願寺派司教 安藤 光慈 先生

ご法話



あんどう・こうじ 1959 生まれ、京都大学文学部卒。龍谷大学大学院博士課程単位取得退学。元龍谷大学講師。中央仏教学院講師。浄土真宗本願寺派宮崎教区宮崎組真光寺住職。学校法人慈光学園理事長、ひかり幼稚園園長。著書に『唯信鈔文意講読』など。

備後教区布教団

仏事に教ええられる私の縁

呼び出し音に電話を取ると、「あの、N ですけど…」という声。

うちのお寺は幼稚園をやっている、その卒園生Nくんのお母さんでした。Nくんは原因不明の重い病気にかかっています、幼稚園に来てからも入院退院の繰り返しで、明日から入院するというと返しました。明日から入院するといふときに「がんばろうね」と声をかけると、小さな拳をにぎって胸の前でガツポーズ。卒園してから治療のために福岡に引っ越していききましたが、小学校にはほとんど通うことができず、一年間をほぼすべて病院で過ごしました。絵を描くこと

が好きで、十二色のボールペンで細かいところまで丁寧に描いていきます。特に橋を描くことが好きで、「第三愛宕橋」と橋の名前が漢字で書かれています。大変賢く、お友だちにも優しく接することができる子でした。一年生の終わり、三月の半ばにお浄土へ往生していきました。

報恩講の「報恩」とは？

毎年三月になると、お母さんから命日のお参りの電話がかかってきます。でも今回の電話は十一月。怪

訝に思つて、「どうされましたか？」とたずねると、「報恩講のお手紙をいただきたいんですが、報恩講って何ですか？」といわれます。こうした質問をされるのは初めてのことです。ともかく私は、「報恩」という言葉の意味から説明を始めました。

「恩」という字は、「めぐみ・いつくしみ」という意味で説明されることが多いのですが、本当はそれだけでは不十分であるように思います。「恩」という字が「因」+「心」であることを考えれば、私が恵まれ慈しまれることになった、その「もとになった心」と考えてもよいかと思えます。つまり、私が育まれるものになつている心です。

「恩」は私が育まれるものになつた心 私たちはさまざま縁をいただいで生きています。太陽の光や空気も縁です。親が私を育んでくれたことも縁

ですし、私を傷つけた人も今日の私の縁には違いありません。そうしたさまざまな縁と私の内なる因によつて今日の私は成り立っているのです。因縁所生の私です。

そして、私を育み、人生を変えてくれたような相手がいて、とくにその相手が私のことを思い、私に対して願いをもつてくださつていたとき、私たちは「恩を受けた」と思います。その行いに私に対する思いや願いがなければ、それを「恩」とは捉えられません。私に向けられたその思いや願いに対して、それを「恩」と捉えているのです。私を育み、変えてくれた「もと(因)になった心」です。そして「恩に報いる」というのは、その人がよろこんでくださるような私になるということです。

「私はあの子に、恩をうけているのです」 そうした少し理屈っぽい話を聞いていたお母さんが急に、「じゃあ、私もお参りさせてもらいます」といわれます。「先生

(お母さんにとつて私は幼稚園の園長先生です)のお話を聞

「お母さんは健康に気をつけて」と、逝つた小学1年生の子ども

# その人を思うことは、その人と生きてきた私を思うこと

いていたら、そうです、私はあの子に恩を受けているんです」と。話を聞くと、Nくんは亡くなる三ヶ月くらい前には、自分の命はもうすぐ終わるといふことをどこかで感じていたようで、お母さんに向かって何回も何回も「お母さんは元気でいないといけない」「お母さんは健康に気をつけて」というようなことをいつていたのだそうです。たしかに賢い子だったけれど、まだ小学一年生。いつたいどんな気持ちでそんなことをいつていたのだろうと思えました。お母さんは続けて

「私はあの子を亡くして、もうどうしようもなく、でもあの子が私を氣遣っていつてくれた言葉を思い出し出ししながら、今暮らしています」といわれます。私は心が少しざわざわしました。

「恩」という字の意味が分からなくてすると「ついで」といつてはなんです、あのお、もうすぐ七回忌が来ますが、私ずっと「恩」という字の意味が分からなくて…」といわれるのです。

私は存覚上人（本願寺第三代宗主覚如上人の長男）が『至道鈔』に次のように書かれています。紹介しました。

「恩といふ文字の訓はいみなり、是則その亡日にをいて、かの徳を謝するよりほかに他事をいみて禁断する義なり（中略）二親並に兄弟等の亡日には諸事をなげすてて仏事報恩をいとむべきこと、内外の両典にすすむる所なり」

「心をしつかりする」から「遠ざける」へ「心」という文字は、「心」という字の下を表す二本の横線と軸を表す二本の縦線を糸車を表しているのだそうです。糸車はキッチンと巻かないとその役割をなしませんから、「キッチンとする、しつかりする」という意味を持っており、下に「心」があるので、全体で「心をしつかりする」という意味になり、そのためには不都合なものや良くないものを「遠ざける・近づかないようにする」という意味を持つようになっ

たといわれます。

他事を遠慮して、その人を憐れむ心存覚上人のお言葉を考えるなら、年忌というのは大切な人のことを忍んで仏事を営み、「他事」つまりその他のこととは遠慮して、今日はその人を憐れむ心に向けて一日を過ごすということになるのでしょうか。

すでに中国においても三回忌までは「卒哭忌(百ヶ日)・小祥忌(一周忌にあたる)」「大祥忌(二回忌にあたる)」「などの法要が営まれていたことが知られていますが、三回忌の後も七回忌・十三回忌…と年忌のお参りを重ねていくのは日本だけといわれます。

仏事は私のためにあるものだ

その人に心に向け、思い出すとき、そこにはその人の姿を見、声を聞いている私があります。その人を思うことは、その人と生きてきた私を思うことでもあるのでしよう。どこかで、縁起してい



る私であって一人で生きてきた私ではないことを知らされます。有難いことだと思えます。お仏事は私のためにあるのだとあらためて思います。

ふと目をやると、ウルトラマンが…

お母さんにはその後、親鸞聖人のご命日の話をして、受話器を置きました。ふと目をやると、机の上でウルトラマンダイナのフィギュアがこちらを見えています。Nくんからもらった形見のウルトラマンでした。



企画・編集 浄土真宗本願寺派備後教区布教団  
〒720-0052 広島県福山市東町2-4-5  
本願寺備後教室  
TEL084(924)5759  
FAX084(931)9323  
http://bingo.gr.jp